



Data	
監督・脚本:	キム・ギドク
出演:	キム・ギドク
製作:	キム・ギドク
撮影:	キム・ギドク
録音:	キム・ギドク
編集:	キム・ギドク
音響:	キム・ギドク
美術:	キム・ギドク

👁️👁️ みどころ

撮影時の「ある事故」によって、キム・ギドク監督が大ピンチ！人里離れた小屋にこもった彼はどんな自問自答を？自己と向き合うもよし、反省もよし。しかし、3年は長すぎるのでは？

ところが、そんな中でもカメラは回っていた！そして、ドキュメンタリーともドラマともファンタジーともつかない本作がカンヌで絶賛！一体何がどうなっているの？それは、能弁にしゃべる1人3役(4役?)の彼を見れば明らかだ。しかし、次はドラマを！3年間の充電期間があれば、次回作への期待はふくらむばかり・・・。

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

韓国の鬼才はなぜ3年間も沈黙を？しかして本作は？

韓国の鬼才にして、私の大好きな映画監督キム・ギドクが大ピンチ！2008年公開の『悲夢』(『シネマルーム22』232頁参照)を撮影中に危うく1人の女優が命を落としかける事故があったことにショックを受けた彼は、以降映画が撮れなくなったらしい。その事故の発生後キム・ギドクは町外れの粗末な小屋に1匹の猫と共に隠遁生活を送ることになり、映画界との接触を一切断ったそう。しかし、そんなことがなぜわかるの？それは3年間の沈黙を破って、2011年5月のカンヌ国際映画祭で上映された本作の中で、彼自身がその状況を語ったからだ。

何と驚くなかれ、いつものキム・ギドク作品どおり91分にまとめられた本作では、製作・監督・脚本・撮影・編集・音響・美術・出演(1人3役)を彼が1人で！すると、本作はドキュメンタリー映画？いやいや、映画冒頭で彼自身が語っているように、本作はドキュメンタリーでもあり、ドラマでもあり、ファンタジーでもあるらしい。そんな本作は

カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門で最優秀作品賞を受賞し、東京フィルメックスでも観客賞を受賞したが、さてその出来は？

何の構想もなくカメラを？ところが・・・

本作は91分の作品だが、「影のキム・ギドク」が登場する中盤からは、いかにも鬼才キム・ギドクらしい構成になってくる。日本の法律では明らかに違法な拳銃づくりやその拳銃による3人の殺害(?) さらに自分自身に銃口を当てて引き金を引くというラストに向けてのシーンを観ていると、次第に観客の緊迫感が増してくるから、これは明らかに映画監督キム・ギドクとして演出している映画だということが見えてくる。しかし、本作冒頭の約10分を観ていると、パンフレットの中のキム・ギドクインタビューで、『アリラン』は、誰かに見せるために撮り始めた作品ではありません。最初は単に自分の姿を記録しておこうと思っただけでした。自分自身のことを自分の言葉で告白してみようと。とても苦しんでいる自分に対し、それを非難するもう一人のキム・ギドクを設定することで、苦しんでいるキム・ギドクを理解してみようと思ったのです。普通の映画作りとはまったく違うところから始まりました」と述べているとおりだということがよくわかる。

しかし、いくら鬼才でも小屋の中の生活や猫の動きをカメラに収めただけのドキュメンタリー映画を観客に提示することはムリだ。しかし、なぜか小屋のドアをノックする音が聞こえたり、1人で三人三様のキム・ギドクを演じたり、さらには自分自身の影を登場させるなどの「アイデア」が思い浮かべば、後は映画監督の本能に従って演出し、さらに俳優としても一流の才能を持つキム・ギドクがキム・ギドク監督の演出に従って、ごく自然に演技を？本作を撮影したのはキャノンマーク2というフラッシュもついていないカメラらしいが、そんなカメラ1つで撮ったとは思えない撮影技術も、さすがキム・ギドク！



(C)2011 KIM Ki-duk Film production.

ここまで突き詰め、ここまで吐き出せば・・・

「あの事件」の後、キム・ギドクが考えたのは、「一人の命を危険にさらして、映画に何の意味がある？」「キム・ギドクの映画で誰かが命を落としたり、恐ろしいことだ」ということ。目に涙を浮かべながら、それを切々と訴える悩める映画監督キム・ギドクの姿には心打たれるものがあるが、ひょっとしてこれもカメラを意識した俳優キム・ギドクの演技？映画の世界はもちろんすべての俗世間から隔離された小屋の中の生活で「あの事件」を反省し、「映画とは？」「人生とは？」と自問自答を続けるキム・ギドクにとって、当初はそんな慟哭が続いたかもしれない。しかし、そんな姿をカメラに収めているうちに次々と映画監督としてのアイデアが浮かんでくると、ついその本能に従った演出を？また、俳優キム・ギドクも自分の本能のままにカメラの前で演技を？生の姿と演技の境目を見つけ出すのが難しいところが本作の特徴だが、まさにそうだからこそ、本作はドキュメンタリーでもあり、ドラマでもあり、ファンタジーでもあるの？

感心するのは、よくまあここまで問題を突き詰め、これだけ吐き出していること。人間が何かを考える場合、頭の中で考えることが大切だが、それだけでは堂々巡りすることが多い。そこで大切なのはメモにまとめることと口に出してしゃべること。しゃべっていると、次第に考え方がまとまってくるのはよくあることだ。そこで必要なのは、そのしゃべりを引き出すための適切な質問、すなわち有能なインタビュアーの存在だが、それを自分自身でやればそりゃ最適。しかして、汚い言葉をふんだんに使って怒りをブチまける1人のキム・ギドクに対して、最初は重い口で少しずつ答えていた悩める映画監督キム・ギドクはその後次第に多弁・能弁になっていく。その自己分析力と表現力はすごい。今ドキの若者はコミュニケーション能力がないとよく言われるが、コミュニケーション能力の前にこのキム・ギドクのような自己分析能力と自己表現能力が必要だ。しかして、ここまで突き詰め、ここまで吐き出せば、そりゃ論点の整理も気持の整理もかなりの程度できるのでは・・・。

次作に期待！

私が最初に観たキム・ギドク作品は、『春夏秋冬そして春』（03年）、その感激は「韓国にこんな映画監督がいたのかと目を開かされた思い」という文章に表れている（『シネマルーム6』68頁参照）その後のキム・ギドク作品は、『サマリア』（04年）（『シネマルーム7』396頁参照）『受取人不明（Address Unknown）』（01年）（『シネマルーム8』77頁参照）『悪い男』（02年）『うつせみ（空家／Bin-jip）』（04年）（『シネマルーム10』318頁参照）『弓』（05年）（『シネマルーム12』325頁参照）『絶対の愛』（06年）（『シネマルーム13』86頁参照）『ブレス（息／BREATH）』（07年）（『シネマルーム19』61頁参照）『悲夢』と続いた。私の採点では『悲夢』だけは星4つだが、他はすべて星5つの最高点。これらのキム・ギドク作品のすばらしさについては、それぞれ私の映画評論を参照してもらいたい。

キム・ギドク監督は『アリラン』の前に、15本の映画を監督しているが、それらはすべてドラマ。ほぼ1年に1本のペースで作品を世に問うてきた彼は、1本の映画の編集段階に入ると同時に次の脚本を書き始めてきたらしい。きっと彼の頭の中には、次から次へと映画のアイデアが浮かんでくるのだろう。前述のように、映画をつくるつもりで回したのではないカメラから思いがけず(?)ドキュメンタリーともドラマともファンタジーともつかない、極限まで自己露出した本作が誕生したらしいが、やはりキム・ギドク作品はドラマの方が面白い。ある意味では小屋の中で3年分の充電ができたわけだから、次回作以降はもっと早いペースですばらしいドラマがつくり出されるのでは?次作に期待!

この歌唱力にビックリ!歌手としても超一流?

韓国は「恨」という言葉が最も似合う。そんな常識(?)はいい加減払拭してもらいたいが、キム・ギドクが歌う『アリラン』の歌を聞いていると、その中に込められている(?)「恨」の思いが伝わってくる。もっともチラシによると、『アリラン』とは『自らを悟る』という意味を持つ代表的な朝鮮民謡で、「アリラン 上り坂 下り坂」という歌詞は、まさに上っては下る人生そのものを表現している。そうだが、私が感じたような「恨」の思いもこもっているのでは?それはともかく、本作ではキム・ギドクの弁護士顔負けの能弁さにも驚かされるが、歌手顔負けの歌唱力にもビックリ!

宮本武蔵は若い頃、沢庵和尚によって幽閉された暗黒蔵の中で万卷の書を読んだが、その期間は3年間。それと同じように、3年間もこもった小屋の中で彼が毎日この歌を歌っていたのかどうかは知らないが、韓国の映画界への不満等を含めた彼の映画や人生に対する万感の思いがこの歌の中に込められている。ちなみに『キネマ旬報 4月上旬号』の「第84回アカデミー賞 結果座談会」の最後に、渡辺祥子氏は「スマートですっきり仕上がった授賞式だったけど、手作りのぬくもりがなく、全部がCGみたいだった、というのは言いすぎかしら・・・」と語っているが、カンヌ国際映画祭の授賞式で、『アリラン』を熱唱したキム・ギドクは鳴り止まないスタンディングオベーションに包まれたらしい。なるほど、鬼才キム・ギドクらしい演出だが、通り一遍の喜びの言葉よりその方がより彼の思いが伝わるのでは……。彼は『春夏秋冬そして春』では上半身裸になっての見事な武術の型を披露してくれたが、本作では見事な歌唱力を披露。すると、近い将来彼は歌手としての出演もあるのでは・・・?

2012(平成24)年4月7日記